

第5章 調査成果の検討

第1節 岡ノ平遺跡と佐用盆地における弥生～古墳時代の墓制

1. 調査の要約

調査において検出した弥生時代の遺構は、総数19基を数える埋葬主体である。これらの持つ特徴については前章で検討したが、もう一度以下に整理し略述する。

- ①埋葬主体群は丘陵から延びる小規模な尾根状の微高地に営まれている。
- ②埋葬主体は長方形に近い平面を持つものが大半を占め、底部が平坦で小口穴を検出できたものもあることから組み合わせ箱型木棺を採用したものと推定できる。
- ③各埋葬主体は、近接するものの主軸方向が等しく、いくつかの小グループによって構成される。ただし各グループ間を区画する溝などは存在しない。
- ④遺構に伴う出土遺物は少ないが、ほぼ弥生後期から古墳時代初頭にかけての時期と考えられる。

遺物ではS T-19から出土した碧玉製管玉の存在がある。3点出土した管玉はいずれも3 cm 近くを測り、時期的にみれば大型な印象を与える。原石産地は現時点で不明だが、今後調査が進むことによって当地の交流の一端が明らかになるう。

2. 地域的位置づけ——佐用盆地における墓制

佐用郡内で弥生から古墳時代にかけて営まれた墳墓群には岡ノ平遺跡のほか、弥生中期の木棺・土壙墓群を検出した長尾・沖田遺跡や古墳時代前期の木棺墓と小竪穴式石室群である吉福遺跡、弥生時代の土壙墓の見られる本位田遺跡、古墳時代前期の壺棺墓が存在する甕石遺跡などが知られている。特に本遺跡の南方に位置する長尾・沖田遺跡の埋葬主体群とは直線距離が約100mと近接しており、近い関係が想定できる。一方この地域においては前期に属する古墳が見つかっておらず、続く中期古墳も可能性を指摘される愛宕塚古墳（円応寺1号墳）が挙げられるのみである。後期に入ると周辺で唯一の前方後円墳と考えられる横坂1号墳のほか、長尾古墳群や本位田古墳群といった横穴式石室を持つ群集墳が丘陵に数多く営まれる。

以上の状況を踏まえた上で、岡ノ平遺跡と時期的に近接する長尾・沖田遺跡、吉福遺跡について比較検討し、弥生から古墳時代における墓性の把握と位置づけを行いたい。

まず長尾・沖田遺跡と岡ノ平遺跡には比較的似通った状況を見出せる。両者とも丘陵先端の台地上に営まれた木棺墓群で、主軸方向などからいくつかのグループが抽出できるが、グループ間を隔てる施設は存在しない点に注目したい。構成する木棺の規模は岡ノ平遺跡の方が大型化しているなどの傾向を指摘できるものの、両者間の変質は緩やかだと言ってよい。ともに標高110m前後の微高地上に立地することについては、これらの母体となる集落に近い場所に墓

地が営まれた結果と捉えられる。事実周辺で行われた発掘調査では、弥生から古墳時代にかけての遺構が数多く存在し、長尾台地上には拠点集落の存在が想定されている。ただこれらの調査も散発的なもので、集落と墓域の厳密な位置関係や有機的な関連性については、今後の調査に依存せざるを得ない。

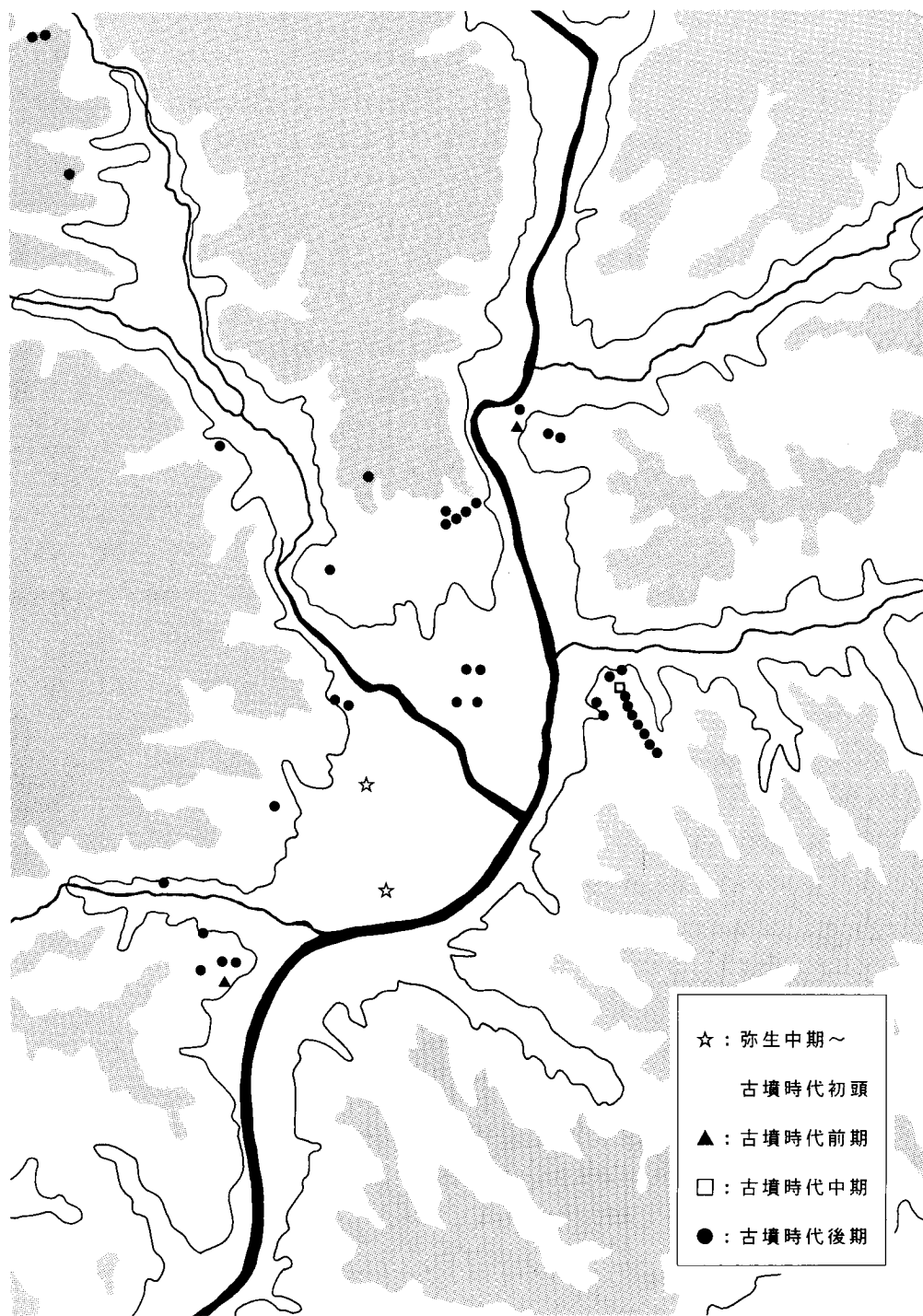
対して吉福遺跡は、若干違った状況を呈している。まず長尾・沖田、岡ノ平遺跡が丘陵の麓部にあるのに対して、標高180mの丘陵上に立地する点が注目される。甕石遺跡などの古墳前期にあたる壺棺墓も丘陵上にあることから、この時期に墓域が平野部から丘陵上へ移動している可能性が高い。これは集落と墓域が近接した位置関係を示す長尾沖田・岡ノ平両遺跡と基本的に異なり、集落との分離がなされたためと考えられる。また墓群を区画した「石列」の存在も大きな特徴である。先の2遺跡においては墓群を構成するグループの存在が看守できたものの、それらを区画する施設は存在しなかった。小竪穴式石室という新しい埋葬形態の導入に加えて構成する墓同士の区別が芽生えてくるなど、墓地の様相や構造が大きく変化している事実は見逃せない。この差異は、吉福遺跡が明らかに弥生時代の集団墓から脱皮しつつある要素と捉えられよう。

以上の特徴を整理すると、弥生時代の集団木棺墓である長尾・沖田遺跡から岡ノ平遺跡、そしてこれらの集団木棺墓の様相を残しつつ、新しい埋葬構造—小竪穴式石室を採用する吉福遺跡への系譜関係が整理できる。しかしこの後の愛宕塚古墳出現までに見られる時間的空白は、当地方の古墳採用のあり方と大きく係わる問題である。古墳時代前期から中期には今のところ顕著な集落跡も見つかっておらずデータ不足の感も否めないが、墓制変遷から見た場合に古墳社会成立のプロセスで何らかの断絶を認めざるをえない。

3. おわりに

以上見てきたように、当地方の墓制変遷はなお流動的で今後の調査成果に依存するところも大きい。現段階での一応の見通しを述べておく。集団墓の色彩を持つ木棺墓群は、弥生時代中期以後集落と比較的近接した位置に墓域を設定し、古墳時代初頭まで内的変化を遂げながら営まれ続ける。さらに古墳時代には墓域が丘陵状に移動するとともに、集落との明確な分離が行われ始める。また、前期古墳が未見である点については存在を否定しきれないものの、この時期本格的な古墳は導入されず、丘陵上において弥生集団墓の色彩を色濃く残した古墳時代前期の墳墓が営まれたことが想定される。佐用盆地における本格的な古墳の採用は中期の愛宕塚古墳をもって開始されたと考えられ、この出現を佐用盆地内の統一がなされた結果と理解することは、あながち間違いではないであろう。

これらの状況は、佐用を流れる千種川流域に視点を拡大しても同様である。千種川流域は首長墓に比定しうる古墳が数少なく、他の播磨の地域との状況を異にしている。



第36図 佐用盆地周辺の弥生墳墓・古墳分布図

古墳造営の母体となった、弥生時代の墳墓は調査例が少なく、継続して墓制変遷を追える資料は限定されている。特筆すべき物として、千種川下流の赤穂市有年で相次いで発掘調査された墳丘墓があげられよう。この墳丘墓は弥生時代中期に比定でき、出土遺物や規模等も周辺では傑出する。有年には、当地方の盟主墳と考えられている蟻無山1号墳のほか以後に築かれた古墳・周辺にある集落にも特筆されるものが多く、比較的大きな勢力の存在を指摘できる。しかしその他の地域では前・中期古墳は余り確認されておらず、三角縁神獣鏡の出土した西野山3号墳などがわずかに知られる程度である。特に河川沿いに小規模盆地が存在する中・上流域においては、顕著な墳墓・古墳が見当たらず、古墳時代前期においても、弥生時代の集団墓の性格を色濃く残す墳墓が造られた可能性が高い。また、これらの地域に共通した特徴として、佐用で見られるように一つの盆地内を単位とした自己完結制が強い墓制を呈する傾向が見受けられる。この特徴は地形の制約による生産力の限界などが要因となって大規模古墳を築きうる勢力が成長しなかったことが本格的な古墳導入の遅れとして反映された結果であろう。

佐用盆地で、弥生時代営まれた木棺墓群の系譜を色濃く残す墓制が、若干様相を変化させながらも古墳時代にもなお存在する状況は、当地方における「墓」の変質や古墳の採用、さらに弥生時代から古墳時代への変革を考える上で大きな手掛かりとなろう。そのなかで今回の岡ノ平遺跡の調査は、当地方の墓制を考える上で重要な一視点と考えられる。

◇参考文献◇

- 石野博信ほか「播磨吉福遺跡」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』兵庫県教育委員会 1974
- 井守徳男「本位田遺跡」『中国縦貫道建設に伴う発掘調査報告書（佐用編）』兵庫県教育委員会 1976
- 岩橋隆浩「墓地から見た弥生社会の変質過程」『紀要』第4号 滋賀県文化財保護協会 1990
- 大平 茂ほか「長尾・沖田遺跡発掘調査報告書Ⅰ」兵庫県教育委員会 1991
- 岸本道昭「西播地域の首長墓とその動向」『兵庫史の研究 松岡秀夫傘寿記念論文集』神戸新聞出版センター 1985
- 中山俊紀「美作地方弥生時代墓制の特徴」『オノ峪遺跡』津山市教育委員会 1985
- 榎本誠一「千種川下流域の古墳」『歴史学と考古学 高井悌三郎先生喜寿記念論集』高井悌三郎先生喜寿記念事業会 1988
- 福永伸哉「弥生時代の木棺墓と社会」『考古学研究』32巻1号 考古学研究会 1985
- 宮崎素一・藤田忠彦『有年原・田中遺跡』赤穂市教育委員会 1991
- 和田晴吾「古代山陽道沿いの古墳の動向」『山陽道（西国街道）歴史の道調査報告書第二集 兵庫県教育委員会 1992